

別対談

芦屋市長
高島 峻輔

げるとともに、大阪・関西万博で手掛けたパビリオンのテーマでもある「いのちを守る」について伺いました。監督が描くテーマを通じて、観客にどのようなメッセージを伝えようとしているのか。芦屋という街が映画に与える影響についても語っていただきました。

ことが、大切です。まず対話は「何を言うか」以上に「聴く耳を持つこと」も大事で、聴くことによって相手の中に自分も存在できるのだと思います。そして、何か言うときには相手にぶつけるのではなく、相手と自分の間に言葉を置くことをイメージします。その時、相手の反応を待つ、前出のように沈黙が生まれるかもしれませんが、相手がどんな反応をするかを待つみることも大事だと思います。



高島市長 そうですね。私もこれまで「対話」を重視し続けてきたのですが、河瀬監督はなぜ「対話」を大切にされているんですか。

河瀬監督 「対話」というのは、私にとって単なる言葉の交換以上の意味を持っています。映画づくりや万博パビリオンで常に意識してきたことのひとつが、どれだけ観客の皆さまと心の深い部分でつながることができるかという点です。対話は、相手の存在を尊重し、理解しようとする心の交流です。だからこそ、パビリオン内での体験は、観客が一方的に情報を投げるだけでなく、相互に影響を与え合う場所

あってほしいと思いました。来場者が自分の想いを言葉にしたり、他者の考えを聴いたりすることで、その場で生まれる共感や理解が、次につながる対話を生み出すのです。映画の中でも、登場人物たちが心を通わせ、関係を構築してゆく過程は、観客にとっても共感を呼ぶ瞬間です。人々が共に感じ、共に考え、共に行動できる場。それが対話の力だと感じています。

高島市長 対話を重ねてこられて、対話で世界の平和は訪れると思いませんか。

河瀬監督 世界は変わると思います。しかし、平和かどうかはまだわかりません。でもその方向に進んでゆくと信じています。

地域社会のつながりが「いのちを守る」

高島市長 河瀬さんにとって「いのちを守る」とはどういう意味ですか。

河瀬監督 「いのちを守る」というテーマは非常にシンプルで、根源的なことを指していると考えています。私が思うに、「いのちを守る」というのは、他者と共に生き、支え合うことで成り立つものです。それが地域社会の中でどのように実現されていくのかが、社会の課題です。この考えは、私の経験に基づいています。まだこどもが小さく、子育てをしながら映画を撮っていたとき、自宅の近所に住んでいた恩師の奥様が夕飯のおかずを多めに作ったからと持ってきてくださって本当に助かったんです。その時、「このお礼をどう返せばいいのか？」と悩みました。すると奥様が「直美ちゃんが私と同じ年齢くらいになった時に、同じように誰かに何かを渡してあげて」と言っていました。地域は一对一の関係だけでなく「その想いをあらゆるものへ還元していく」、この考え方こそが循環を生むのだと思いました。そのようにして、地域の中で「命」が守られ、育まれていくと感じています。

河瀬 直美

映画監督

河瀬 直美

かわせ なおみ



高島市長 「恩送り」ということでしょうか。人から人へ、対話を通じて想いが循環していく、そんな「まち」は素敵ですね。

河瀬監督 万博で展示した「いのちを守る」というテーマも、こうした地域社会の循環の重要性に根ざしています。地域の中で人々が互いに支え合い、困っているときには手を差し伸べ、与えられたものをまた他の人に渡していく。そのつながりと対話が「いのちを守る」ことにつながるのだと考えています。



高島市長 「対話を中心としたまちづくり」の意義を、より深く表現していただいた気がします。対話の文化を芦屋に根付かせることで、よりよく生きる人が増える、そんな場づくりをしていきたいです。

さいごに

河瀬監督 いろいろな縁がつながってたどり着いたこの芦屋の風景やサンモール商店街などで繰り広げられる人間模様が、私には本当に愛おしくてたまらないものになっています。映画の主人公はもういないけれども、芦屋川駅の電車の音を聞けば主人公たちが確かにここにいたんだという感覚になります。

高島市長 そういった意味ではここで演じたというよりは「ここで生きた」ということですね。そんな映画『たしかにあった幻』、いよいよ2月公開ですね。

河瀬監督 できるだけ丁寧に皆さんに届けたいと思っていますし、「ここは芦屋のあそこだね」と思いながらご覧いただけると嬉しいです。

高島市長 監督の想いを劇場で共有できることを楽しみにしています。本日はありがとうございました。

【河瀬 直美】生まれ育った奈良を拠点に映画を創り続ける映画監督。一貫した「リアリティ」の追求はドキュメンタリー・フィクションの域を越えてカンヌ映画祭をはじめ、世界各国の映画祭での受賞多数。世界に表現活動の場を広げながらも、2010年には、故郷・奈良にて「なら国際映画祭」を立ち上げ後進の育成にも力を入れている。ユネスコ親善大使、奈良県国際特別大使を務めるほか、2025年大阪・関西万博ではテーマ事業プロデューサー兼シニアアドバイザーを務めた。俳優として、第38回東京国際映画祭最優秀女優賞を受賞する他CM演出、エッセイ執筆、DJなど、ジャンルにこだわらず活動中。プライベートでは、10年以上にわたりお米作りにも取り組んでいる。新作劇映画『たしかにあった幻』が、2026年2月6日に公開。前売券・映画に関する情報はホームページまで。



ホームページ